

岩日タイムズ

発行者 岩瀬日本大学
高等学校 新聞部
山井彩葉 後藤多崇 高野裕崇

感じ、考え、作って伝える

創造の力、結集

〜2016ひろしま総文〜

八月一日から三日間、全国高等学校総合文化祭（ひろしま総文2016）新聞部門に参加しました。広島女学院大学を会場に、各都道府県から選ばれた新聞部や委員会の代表者が各班に振り分けられ、交流新聞を作成しました。取材先は平和記念公園をはじめ、お好み焼きや広島カープなど多岐に渡ります。全日程を終え、各班毎の個性溢れる新聞が完成しました。



呉の海自カレーを試食

私は、呉市の海自カレーと、中通りの商店街にある伝統的なお店について取材し新聞を作成した。海上自衛隊で食べられていたカレーを隊員から直接作り方を教わり再現したもので、艦船ごとに独自のレシピがある。今では三十店舗のお店が認定を受けて販売している。また、肉じゃがが発祥のお店の「いせ屋」にも話を聞き、食に携わっている



練り混ぜをする熊野筆の職人南部さん

方々の思いや歴史との関わりについて呉市を見つめてみた。（山井）
私は、熊野筆について取材し、交流新聞を作成した。熊野筆とは、化粧品をはじめとした高級筆である。サッカー女子などでしこジャパンの国民栄誉賞の副賞として化粧筆が贈られたことは有名だ。年々、職人の数が減り、後継者問題が重視されている。交流新聞の作成過程では、レイアウトと題名にこだわった。「皆が読みたくなる新聞」を目指してインパクトのあるタイトルをつけた。交流新聞作成を通して、新聞を作るための注意点や工夫点を学ぶことができた。（後藤）

※練り混ぜとは、糊と毛を混ぜあわせて形成させていく作業。熊野筆づくりに、工程を重ねる毎に技術を伴う。

今回、私たちは、茨城県の新新聞部門の代表として広島総文に参加しました。「文化部のインターハイ」と言われる総文祭、全国のハイレベルな新聞やその発行者たちと接することで新聞に対する考え方や視野が格段に広がりました。それと同時に自らの至らなさを実感しました。この経験はこれからの新聞制作はもちろん、自分の人生のためにもなるとても有意義で貴重なものになったと確信しています。私たちがあの場に立ち、見聞を深めることができたのも、日頃助言を頂き、取材の依頼をすれば快く受け入れてくれる先生方や生徒の皆さんのおかげです。そのことへの感謝を忘れずに、今回の経験を生かし、これからの新聞は今ままで越えられる完成度になるよう部員一同協力して日々の活動に励んでいくことを誓います。これから更なる高みを目指す岩日タイムズにどうぞご期待ください。（高野）

編集後記

「世界を変えるのはあなたたち」

〜ピースボランテニア 忍岡さんの思い〜

今年五月のオバマ米大統領の広島訪問は、全世界の注目を集めました。私たちも総文祭当日、広島市の平和資料館を訪れました。そこで原爆投下当時の様子や体験談を語り継ぐ、ピースボランテニアの一人である忍岡妙子

さんと出会い、お話を伺うことができました。忍岡さんは週一回ボランテニアとして来館した人ばかりやすく解説する。「あなたたちが選挙権を持ち、政治に関心を持って世界を変えていってほしい」



忍岡さんに取材する後藤さん

平和記念資料館にある写真や資料、実物を見ると戦争の悲惨さを物語っていた。原子爆弾投下直後の人々の火傷や、周辺の火災をリアルに再現されたジオラマや模型は、原爆の恐怖を体験させ、今でも目に焼きついていてる。取材を通して、この戦争は二度と繰り返してはいけない、そして記憶を風化させてはいけないと改めて感じた。そして、今回忍岡さんに教えてもらったことを私たちが自身が次の世代につなげていくことが大切だと思った。



71年の時を刻んだ原爆ドームの前で

論説

「君たちもこの場に集まっている以上、記者として、なぜ新聞を作っているのかを常に考えて行動せよ」

総文祭の開会式で講話をして下さった中根先生の言葉である。その言葉を含め、今回の総文祭で筆者は、「新聞」という存在、そしてなぜ自分が新聞を作っているのかについて深く考えさせられた。

なぜ新聞を作るのか

主体的に行動すべきだ、しかし、主観的になつてはいけない。多角的な視点を持って物事を捉えよ。しかし、記事にはテーマの一貫性を。改めて挙げる条件は、矛盾ストレスの無い理難題ばかりに思える。なぜこんな面倒なことをしてまで新聞を作っ

ているのだろうか？自分でも少し疑問に思ったくらいである。だが、そんな感情を軽く吹き飛ばすくらいの魅力が新聞にはある。これは個人の感想だが、新聞（特にこの岩日タイムズ）を書く毎に、この学校の新たな魅力に気づいてより一層この学校が好きになる。次に

記事を書くときにはどんな発見があるのだろうか？と日々胸を踊らせている。筆者が新聞制作をしている大きな理由のひとつは、そんな発見に対する好奇心と、この学校に対する愛着なのだ。気が付いた。さながら想い人のことを知りたいと願う恋心のようにある。新聞と、この学校に恋をしていくこと。それが筆者がなぜ新聞を作るのかについて考えた末に出た結論である。（高野）



ピースボランテニアの忍岡さんと共に